

この物語はフィクションだと思えます。

フィクションなので、登場する人物名・団体名などは実在のものとは関係ないものと思われるのですが、とてもよく似た実在の人物がいらっしゃるようですので、強く言われると自信がありません。でもきつと、フィクションなので関係ありません。

関係ないことになっておいてください。

序

目次

①	大翁、憂慮の程を表明す……………	九
②	鸚鵡石、小童を顕現す……………	四一
③	狂気と妖気、混濁す……………	七三
④	妖怪研究者、黄昏に咆哮す……………	一一一
⑤	猟奇、日常に侵食す……………	一六三
⑥	御意見番、小童を検分す……………	二一一
⑦	怪談作家、幻滅す……………	二五三
⑧	妖怪博士、絵巻を前に困惑す……………	二九三
⑨	恠異の学徒、狼狽す……………	三四一
⑩	妖怪専門誌編集者、紛糾す……………	三八三

虚実妖怪百物語



砂塵さじんの中に男おとこが立たっている。

砂埃すなぼこりはまるで霧きりの如ごとくに地表ちへつを覆おおっており、まるで紗幕しやまくに遮さへきられたかのようようで、そう暗くくも
ないといいうののに、男おとこは景影しんげいにしか見みえない。

服装ふくそうも何なにも判わからない。

たただ、長身ながみであるといいうことことしか知しれない。

瘦やせた、太おきな男おとこだたった。

男おとこの目めが何なにを見みているののか、それそれも判わからない。

戦争せんそうが終おわって、ままだ幾年いくねんも経たっていない。いまいまだこの国ここのくにの政情せいせいは不安定ふあんていである。

数多あまたの非合法ひごうはな武器ぶきが行いき来きした道みちでもああった。

ししかし、今いまはそれそれも絶たえている。

稀まれに見みかける遊牧民ゆうぼくみんの姿すがたもなない。

男おとこが国境こくけいを越こえて来きたのかのかどうどうかは知しれない。

忽然と現れたというべきだろう。何故なら、ここ数日の間に、この男と思しき人物が、隣接する幾つかの国にその姿を現しているからである。

その動き方を見る限り、男にとって、国境はあまり意味のない、ただの地図上の線引きに過ぎないようだった。しかし現代に於て国境は、目に見えこそしないものの、たぶん最強の結果である。越境できるのは極めて限られた者だけだろう。

その上、この地は筋金入りの紛争地域なのだ。

場所が場所であるから、まともなルートを通つて来られる土地では決してない。況て、国境を跨いで自由自在に行き来するなど、常人に叶う芸当ではあるまい。

環境もまた過酷であった。男が立っているその場所は、たとえ許可を得て入国した者であったとしても、気軽に観光ツアーで来られるような地域ではないのである。もちろん、徒歩で来られるような処でもない。しかし、男の周囲には、男の姿以外、何もなかった。

そこに男が存在することは、あらゆる意味で不可能なことであった。

男は常に神の如く顕れ、そして鬼の如くに没えるのだ。そうとしか思えない。

大きく、風が吹いた。

風は砂を巻き上げ、一瞬男の姿は見えなくなった。風いだ。

男の輪郭が少しだけ明瞭になった。

マントのようなものを纏い、長靴を履いている。

頭には軍帽のようなものをきっちり被っている。

聳えるような巨軀ではあったが、男の相貌は東洋人のそれである。尤も、顔の半分は黒い革のマスクで隠されている。しかし僅かに覗いた眼に、亜拉伯人^{アラビア}人や比耳西人^{ベルシヤ}人の面影はなかった。亜細亞人^{アジア}——否、男はどうやら日本人なのである。

日本人だとしても、その衣装は些か時代錯誤なものであった。

それは、軍服なのだ。しかも第一次世界大戦当時の日本軍が着用していた意匠^{デザイン}の軍服なのであった。階級は判らなかつた。しかし装備から推し量るに将校のそれであることは間違いないようだった。

本物ならば、百年から昔の衣装である。

百年前の日本の軍人が、遙か遠く異国の砂漠に立っているのだ。

姿勢良く立った男は長い間微動だにしなかつた。

やがて——。

何処か死人めいた男の落ち窪んだ両の眼窩に、鬼火の如き陰光が点つた。

男が見据えているのは、この、現世の大地ではないのだ。数千年に亘り、無数の民や兵の血を吸い、幾度も業火に焼かれたこの魔所の、気が遠くなる程の過去の姿を、男は見透かしている。

古い、あまりにも古い、文明の亡霊と、男は無言で交信している。

突然。

男は右腕を天に向け高く上げた。

「朽ち果てし太古の叡知、忘れられし怨念よ——」

吾に従え。

そう叫んだ男の手に嵌められた白手袋の甲には。
五芒の星が染め付けられていた。



大翁^{たいおう}、

憂慮の程を表明す

「何かどっかで聞いたような話ですよね——」

榎木津平太郎の言葉は完全に無視された。

編集長は車窓を流れる調布の景色をただ眺めている。

聞こえなかったのか。

機嫌が悪いのかそうでもないのか、判断するのが難しい。噂に依ればこの人はその昔、もつとずっと怖い人だったのだそうだ。齡をとって丸くなったのか、大人の対応をした方が得だと考えているのか、それは判らない。

ある人——小説家の京極夏彦——の談に依るならば、単に飲み過ぎで色々面倒臭くなっているだけだというのが。色々面倒臭いから飲んでいただけという見方もあるらしいけれど。

いずれにしても面と向かって怒鳴られるようなことはない。ないのだけれど、どうも切れ長の眼が威圧的だったり、頬が不満を表明していたり、そういう無言の攻撃が多いので困る。

機嫌の読み取り難い上司というのは殊の外扱いづらいものである。というか、そもそも機嫌をとろうと思つての発言だったのだが。

「何なんですかね、これ」

「どれ」

すげえ低い声で返された。

「いや、いや、シリア砂漠に現れた旧日本兵らしき怪人の話です。ほら、メソポタミア文明かなんかの遺跡が見つかったんすよね？」

「見つかったね。あるんじゃない、遺跡。あの辺は掘りや出る感じだよ」

「いや、ですから、現地の軍隊かなんかがパトロール中に人影を発見して、したら突如竜巻みたいなもんが発生してですね、立ち往生してる間にその怪人は立ち去ってしまい、その怪人が立ってた場所の砂漠がザックリえぐられてて、そこにあつた訳でしょ？ 未発見だった遺跡が。どうやったって一人や二人で掘れるもんじゃないらしいじゃないですか」

やけに説明的な物言いだ、説明なんだから仕方がない。

「偶然だろ」

取りつく島がない。

「いや、でも日本兵つすよ？」

「日本兵なんかいないから」

「いや、恰好かつこうです恰好。コスチューム」

「なら別にいるさ、そのくらい。コスプレだよ」

「イラクですよ？」

「イラクの人だつてするかもしれないよコスプレ。知らんけどさ。したつていいだろ」

「いいですけど」

「じゃあいいじゃん」と打ち切られた。

「でも、日本兵すよ。陸軍将校」

蒸し返す。

「いるかもしれないだろうマニヤが。そうでなきや、馬鹿な日本人だよ」

「いますかそんな人。そのコスと、中近東関係ないすよ」

「いるんだよ日本人は何処にでも」

「そうですね」

平太郎は手許のスマートフォンから目を離し、編集長——郡司聡の顔を窺った。

やっぱり機嫌が読めない。

以前は、邪悪な五月人形と呼ばれていたらしい。そういう解るような解らないような渾名をつけるのは概ね京極なのだそうであるが、近くにいると気持ちは伝わる。切れ長の眼といい比率といい、まあ金太郎的なのだが——怖い。

どうも尻の据わりが悪い。

もう一度蒸し返す。

「これって——加藤保憲っぽくないですか？」

加藤保憲——。

それは、荒俣宏の名著『帝都物語』に登場する魔人の名である。

平太郎は中学一年の時に読んだ。合本の文庫だったと思う。六巻続け読みして、お蔭で中間テストの結果が散々だった覚えがある。

公立中学の試験問題に、奇門遁甲の腹中蟲だのは出ない。

映画もDVDを見た。

一本目の監督が実相寺昭雄だったので驚いた。

『ウルトラセブン』の印象しかなかったからだ。

というか、そもそも平成生まれの平太郎の齢でセブンはないようにも思うのだが、平成セブンで嵌まって、セブンXも観て、旧作もレンタルで観ていたのである。

『帝都』をきっかけに、実相寺作品もかなり観た。背伸びして色々観たが、一番気に入ったのが『怪奇大作戦』の「呪いの壺」あたりだった訳で、当然実相寺作品以外にも全話観て、『シルバー仮面』なんかまで観て、鯉の詰まり昭和特撮に首まで浸かってしまった。

いったい何年生まれなんだか、もうさっぱり判らない青春時代の一コマだ。

中学高校の頃は、いい齢をして怪獣かい——と、能く謂われたものである。一方、筋金入りの特撮ファンからはニワカ扱いされたりした。

いや、昭和特撮はニワカですが、生まれた時から観てはいますよ特撮。それにみんな最初はニワカだと思うのだが、どうなんだろう。平太郎なんかは後からやって来るお友達はみんな大歓迎なのだ。

ただまあ、平太郎が特撮一筋でなかったことは間違いない。いや、平太郎は、昭和特撮に溺れていた時分、夢枕 獺の『陰陽師』あたりが火付け役になった安倍晴明ブームなんかにもご多分に漏れずしつかりハマったりもしていた訳である。

そちらはまあ、全世代的にブームだった訳だし、岡野玲子の漫画なんかも含めると女子にもかなり人気があった訳だから、スキスキ言ってもそんなに目立たなかった。

でも、平たく考えてみれば、女子中学生が陰陽師好きって、そっちの方が変な気もするのだが、どうなのだろう。まあブームというのは恐ろしいものである。

ただ、怪獣と一緒にするかなあ——とは能く謂われた。

女子の多くは怪獣に興味を持ってないようだった。鬼とか怨霊とかは平気なくせに。まあ最近の特撮はイケメン流行りだが、怪獣が暴れる昭和特撮にはどちらかというと汗臭いオヤジが似合っていたりするので、その辺は仕方がない気もするけれど。

平太郎はどちらもストライクだったのである。

節操がないといえれば節操がないのだが、まあ平太郎的にはあまり差がない。

今にして思えば、『帝都物語』が平太郎がその手のものにずぶずぶとハマって行く入り口になっっているようにも思うのだ。

『帝都物語』から昭和特撮に移行するのは自然だ。『帝都物語』から陰陽師も、これは超自然だ。いや、スーパーナチュラルという意味ではない。チョー自然という意味だ。ともかく自然だと思ふ。少なくとも不自然だとは思わない。すべての道は『帝都』に通ず、である。

すべて根源は『帝都』なのだ平太郎の場合。

それまでは、寧ろアニメばっかり観ていたように思う。というかアニメは今でもたつぷりと観ている訳で。生まれてからこの齢まで観倒しているのだから、好きなアニメを挙げろと謂われても、指を折って行くともう両手両足の指では収まらなくて、隣近所の手も借りなければならぬ程だ。

いや——平太郎は、自覚こそないのだが、どうもオタクであるらしい。

平太郎自身はそう思っていない。

オタクというのは対象が明確なものではないのか。

鉄道とかフィギュアとかアニメとかプロレスとかアイドルとか特撮とか、いずれ○○オタクと呼ばれる人達は、その○○の中に入るものに情熱を注いでいるのだろう。

平太郎には、その○○の中がない。

空欄なのではない。もやーっとしている。

特撮が好きなんだから映画も怪獣映画なんかは大好物なのだが、ゾンビだってパニック映画だってアクション映画だって好きだ。でもアニメも好きだ。じゃあアニメばかり観ているのかといえどそんなことはなく、原作マンガも読む。別にアニメ化されていなくて読む。ホラー系妖怪系オカルト系、似ているけどみんな違う。で、テレビの心霊特番なんかは喜んで観るし、怪談実話だか実話怪談だか——平太郎はどっちがどうなのか実は解らないのだが、そういうものももう、貪るように読む。

でも実話じゃない方もかなり好きで、幻想文学と呼ばれるような作品にも目がない。好きが高じて原書で読みたい衝動に駆られ、フランス語を勉強したりしたが挫折した。ミステリに浮気したからだ。

ミステリは国産から入って翻訳物に移り気し、やっぱり原書で読みたくなったのだが、英語の成績はメタメタで、教科書すら読みこなせない者にややこしいトリックだのアリバイだのが理解できるはずもなく、挫折する前に頓挫した。

どっちにしても小説好きではあるんだらうからどっかの文学部にでも進学しろと高校の担任には言われたのだが、民俗学や文化人類学にも未練たらたらで、それは何故かと言えば、やっぱり妖怪やなんかに興味があったからなのだ。でも民俗学は妖怪を研究する学問じゃないと叱られて、もたもたしているうちにどうしようもなくなつて、結局は二流大学の社会学部経済学科に行くことになつたくらいだ。

それ程、人生を左右するような選択ができなくなるくらいに、平太郎の嗜好性はもやもやなのである。そんなモワつとしたものが好きだからといってオタクを名乗つたりしたら、オタクの方々に失礼だろう。

まあ、一本筋が通っているとしたら、やっぱり根っこにある『帝都物語』なのだ。

そしてもうひとつ——ガキっぽいところになるだろうか。

そこだけは自覚している。

平太郎はガキっぽいのである。

そんなだから、就職も失敗した。

大手出版社をいくつか受けたが、全部落とされた。

漢も引っかけられなかったというやつだ。

これで完全無欠の就職浪人、ここはバイトでもしながら無為で虚しい日々を送ってやろうと
肚を括り、どうせ一級か二級下はゆとりなんだ就職できたって長くは保たないから自分なんか
は来年以降がチャンスなんだとまるで呪詛のような無根拠なたわごとを呟きながらバイトを探
し回った訳だが。

バイトすらなかった。

というか、お前は既にゆとりじゃないか——と言われた。

そんな自覚はなかったけれど。円周率はおよそ三じやなかったですと言ったのだが、小数点
二桁以下を言えといわれても言えなかったのは事実だ。そうなるとゆとりのどこが悪いんだと
いう気になるから身勝手なものである。脳にゆとりがある分、吸収率も高いデスよと主張した
のに聞いてはもらえなかった。

収入ナシである。

でも郷里に帰るといふ選択はなぜかなくて、このまま都会の片隅で怪しげな本やDVDに囲
まれて得体の知れないオタクとして孤独死するのかなどとひっそり思っていたら、大学時代に
世話になった准教授から、ヒマなら手伝えと声が掛かった。

何を手伝うのか研究助手かはたまた掃除洗濯かと問えば、大学の仕事ではなく友達^が勤めて
いる出版社の使い走りだという。

落とされた会社でバイトするのは厭^{いや}だななどと贅^{ぜい}沢^{たく}なことをほざいていたら、幸いなことに
手伝いを欲しているのは平太郎の受けていない会社だった。

角川書店^{かどかわしよてん}だという。

しかも、『怪』編集部らしい。

『怪』といえば妖怪専門誌である。そのわりに妖怪が載っていないのだけれど、これは書いて
いる人達が妖怪だということらしい。かの、水木^{みずき}しげる大先生^{おおお}が執筆^{しつ}者^{しや}筆頭^{ひつとう}である。

しかも、あの『帝都物語』の荒俣^{あらい}宏^{ひろ}も書いている。

京極夏彦^{きやうごくなつひこ}の小説は厚くて長くて重いので、敬遠^{けいえん}していた。だからミステリに嵌^{かま}まっていた高
校時代にも平太郎はあんまり読んでいなかった。しかし、『怪』の連載^{れんざい}を読んで知り、薄^{うす}めの
やつばかり選^{えら}んで大学時代にはかなり読んだ。

村上健司^{むらまげんじ}の『妖怪事典』は、どういう訳^{わけ}だか二冊も買った。意味もなく、気の迷い^{まよ}い^いのよう^{よう}に
買^かってしま^まったのだ。これは便利^{べんり}なので結構^{けつこう}読み込^こんだ。便利^{べんり}と言^いっても妖怪^{やうかい}しか載^まっていない^い
のだが。『妖怪ウォーカー』も『京都妖怪紀行』も買^かった。結構^{けつこう}いい読^よ者^{しや}だ。

多田克己^{ただかつみ}の本は、一冊しか知らない。知らないだけだと思^{おも}っていたらそうでもなくて、一冊
しかなかったので驚^{おどろ}いた。その一冊^{いっさつ}は持^もっているから、まあこれも良い読^よ者^{しや}である。

世界妖怪会議にも三回ばかり行^いった。

書架を眺めてみたら、『怪』は八冊あった。もつと買っていたつもりだったが、なくしたかしまい込んだかしたのだろう。ブックオフに売ってはいない。買ったつもりになっていただけで買っていないかった可能性はある。定期購読はしなかった。資金不足だったのだ。

そんなに良い読者ではなかったかもしれない。でも。

何にしても、水木しげるや荒俣宏に会えるかもしれないという、そのところは平太郎なんかにとつて何ものにも代え難い魅力だった訳である。何と言つても『ゲゲゲの鬼太郎』はスゴイと思う。国民的マンガだ。そして何より、平太郎の、このモワつとしたとりとめのない嗜好性の入り口になったのが『帝都物語』だったのであるから。

と、いう訳で。

平太郎はほいほい出向いた。

そしてムスツとした怖そうな親爺と、しらつとした細長いイケメン風の男と、ゴツツとした目付きの悪い宇宙猿人下僕風の男にじろじろ見回された揚げ句――。

平太郎は、『怪』編集部に雇われることになった。

まあ、これをきつかけにしてコネを作り、いざれ契約社員かなんかになって、それの上がつて正社員まで――なんてスケベ心が平太郎になかった訳ではない。ないのだが、その調子も都合もい欲望はあっさり瞬殺されてしまった。

角川書店の場合、バイトから社員に昇格するようなケースは皆無なのだそうである。絶無なのだそうである。少ないのではなくないのだ。ナッシングなのだ。

世の中そんなに甘いものじゃないのである。コネが通用するようなヌルい世の中は疾うの昔に滅んでいりし、ずるずると下から上に昇って行けるような蜘蛛の糸は、とっくの昔に切れてしまっているのだ。

しかも、驚いたことに。

『怪』編集部というのは、なかつたのだ。

部屋がないとかいうことではなく、部署として存在しないのである。編集長が一人いるだけなのだ。しかもその編集長は、別の部署の部長なのだ。兼任ではなく、趣味で勝手にやっているような感じである。いや、趣味じゃないのだろうけれど。

後は、水木、荒俣、京極各作家を担当している文芸編集者が不承不承手伝っているだけなのである。といつても、それも今は一人だ。同一人物なのだ。寄稿してくれる他の作家の担当は、原稿の依頼と回収をするだけである。その他のページは編集長の命令で外部の編集プロダクションが作らされている。編集プロダクションが参加するまでは、何となくみんなで作っていたらしい。なんとなくなつて。みんなって。学級壁新聞か。現在は、姉妹誌である『コミック怪』の方の編集部は一応あるらしいのだが、本誌の方はないのだ。雑誌はあるのに編集部がないなんてイカれた話があるものだろうか。

いや。

伝統的でないのだと説明された。

そんなで、よく二十年近くも続いたもんだ。

で。

大きく話は戻る訳だが、『帝都物語』である。

映画で嶋田久作が演じた加藤保憲の姿に、イラクに現れた男の姿が重なった訳である。

あくまで平太郎の脳内では——という話なのだが。

ネットに上がった記事を読んだ時に平太郎が思い浮かべたのは、映画二作目である『帝都大戦』の冒頭で、電柱の上に直立不動で突っ立っている禍々しい加藤の姿だったのであった。

まあ——横でムスツとしている郡司編集長は、元々荒俣担当だったと聞いている。

つき合いもかなり長く、深いらしい。それだけに愉快な逸話珍妙な逸話辛辣な逸話も数多くあると聞く。『帝都物語』が雑誌『小説王』に発表された当時、平太郎はまだ生まれてもいない訳であるが、編集長は確実にその頃から荒俣宏を、そして『帝都物語』を知っているはずなのだ。

というような具合で、何となく無言で気まずい雰囲気を開しようとして、平太郎はこの話題を切り出した訳なのであるが——。

「加藤はトレンチコートだろ」

と言われた。

「は？」

何のことか判らなかつた。

平太郎にとって、加藤保憲は憲兵隊みたいな恰好をした軍人なのだ。原作ではそこそ色んな恰好をしているのだが、やっぱりイメージは軍服だ。コートなんか着ていない。

暫く考えて、それは何年前かに公開された『妖怪大戦争』という映画の話だと気づいた。

それは、大昔に作られた大映妖怪三部作の二作目である『妖怪大戦争』という映画のリメイク——正確には同じ題名の新作でありリメイクではないようなのだが——である。

大映妖怪三部作は、深夜テレビで放映されたのを録画しておいて、小学校の頃に観た。第一作は『妖怪百物語』、第三作は『東海道お化け道中』である。昭和ガメラと併映だったりするから相当に古い。大昔の映画だけに今の人の目から見ればヌイグルミや特撮なんかもショボいのだが、平太郎はその辺は瑕ではなく味だと思う。

そこがまあオタクと謂われる所以なのだが。

旧作は日本に飛来したバビロニアの吸血妖怪ダイモンを日本の妖怪軍団が追い払うという荒唐無稽な話だったが、新版は機械と妖怪が融合した機怪とかいうものが敵で、その機怪のアジトでもあるヨモツモノという太古の邪霊を、お祭りと間違えて大集合した日本中の妖怪が麒麟送子の子供と一緒にやってやっつけるという、いっそう荒唐無稽なものだった。

その新版『妖怪大戦争』に加藤保憲がスピント出演しているのである。

監督は三池崇史、ノベライズは荒俣宏。コミカライズは水木しげる。妖怪キャスティングは京極夏彦。その三人の『怪』作家陣に、あの宮部みゆきが加わってチーム怪となりプロデューサーにあたるという、まあ豪華な感じの作品だった。

豪華なだけに業火に襲われ、スタジオが火事で焼けたりもしたし、試写会を兼ねた妖怪会議の開催中に地震が起きたりもしたのだが——その時の加藤はたしかにトレンチコートのようなコスチュームだった。

演じていたのは豊川悦司とよかわ えっしで、平太郎は所作のキレが良くてカッコええと思ったものである。——そっちじゃなくて。

「いや、昔の方です。『帝都物語』の映画の方」
そう言うと、ああ、とだけ言われた。

「反応薄いですね」

「イラクの遺跡の話なんかどうでもいいから」

「それ『エクソシスト』っぽいですね」

サントラの一曲目の邦題が、『イラクの遺跡』である。

「そういえば、旧作の『妖怪大戦争』もバビロニアの遺跡かなんかが盗掘されて、それでもって甦よみがえるんですよ、吸血ダイモン——」

うるさいなあと編集長は言った。

「連れて来なきや良かったかな」

「それはいいですよ。僕は、もう三箇月『怪』やってますけど、まだ一度も水木先生にお目にかかったことないんですよ」

「別に『怪』やってるって、まだ何にもしてないじゃんか」

「そうですが」

荷物を運んだり、宅配便を発送したり、『怪』が関わっている『お化け大^だ學校』のイベントで椅子を並べたり、編集プロダクションにCDRを届けたり、掃除したり、打ち合わせに無意味に混じってその後の食事に交ぜてもらったりした程度だ。

平太郎は肉体労働ばかりだ。

執筆者で会ったのは京極夏彦と村上健司、多田克己の三人だけである。

京極夏彦は怖そうな人だと聞いていたが、別にそんなことはなく、まあ見た目はやたらに不機嫌そうなのだが、意外に気さくな感じだった。ただ真顔で冗談を言うし、笑いながらキビシイことを言うし、ボケるくせに一切楽観的なことは言わないし、ツツコミは激しいし、色々見透かされているようで、そういう意味では怖い。

多田克己はもつと怖い。本気で何を考えているのか判らないからだ。時に話していることも判らない。色々物を識^しっているのだと思うのだけれど、聞いている平太郎の頭が悪いのか、話の繋^{つな}がりが高^たいパー過ぎてリアクションがとれない。はあ、とかへえ、とか答えるだけだ。時に無視せざるを得ない。その所^せ為^いなのかどうなのか、多田克己という人はいつもムスツとしてゐる。愛想がない。怒っている——のかどうかも判らない。でも京極さんや村上さんなんかとゐる時の多田さんは楽しそうにケラケラ——というか、キキキキという感じで幼児みたいに笑っているから、別に気難しいという訳でもないらしい。というより、あの人達には話が通じてゐるのだろう。恐ろしいことである。

一番平太郎に気を使ってくれたのは村上健司で、この人は怖い感じはしない。平太郎の如きバイトの世話なんかも焼いてくれる。

アニキである。

しかし、平太郎はずっと村上健司という人は坊主頭だと思ひ込んでいたわけで、会うと長髪だったのでやたらと驚いた。何でも、例の『妖怪大戦争』の時、エキストラ出演するのにリアル河童かわぼヘッドになろうと毛を伸ばし、一度皿の部分そを剃って落ち武者というか宣教師のトンスラみたいになったものの、それからまた伸ばして、そのまんまであるらしい。

というか。

——河童ヘッドって。

まあ、みんな悪人ではないのだが、確実に変な人達ではある。多田、京極、村上の三人は妖怪馬鹿というユニットらしい。正確にはもう一人いるんだという話だが、平太郎はその呼び名の元になったという『妖怪馬鹿』という本よを読んでいないので、それこそよく判らない。存在を知って買おうと思つたらもう売っていなかつたのだ。復刊された時も買いそびれ、注文するの何だなあと思つていたら店頭は疎かそろネットでも見かけなくなつてしまつたのだ。

妖怪馬鹿というのは、四六時中妖怪のことばかり考へている人に与えられる称号——であるらしい。

とは言ふものの、横から見ている分には三人とも妖怪の話なんか一切しないから、ただの馬鹿にしか見えない。

なんてことを言うと編集長に殴られそうだが、その編集長からして、連中と一緒にいると馬鹿にしか見えないから困ったものである。

会社では偉いのに。

というか、仕事してる時はこんなに取りつく島のない人なのに。

「まあ、水木さんに会えると思えば誰だって浮き足立つとは思うけどね」

編集長は言った。

「僕もね、最初はそうだったけどさ」

今日は軽口はダメよ、と平太郎は睨まれた。

「岡田が荒俣さんとこ行かなきゃいけないくて、及川もマンガ家さんと打ち合わせで、梅沢さんも記念館の仕事で境港行つてて誰もいないから、仕方なく連れて来たんだからさ。何かあるのか判らんから」

岡田というのは水木荒俣京極共通の担当編集者で、及川というのは『コミック怪』の編集者で、梅沢というのは編集プロダクションの人である。

岡田さんは面接の時にいたイケメン風の人で、髪の毛サラサラで色白細身でモテそうなんだけど、どこか脱色した爬虫類っぽい人だ。仕事はできそうさ。

同じく面接の時にいたのが及川さんで、こちらは色黒でずんぐりしていて髪のももゴワゴワのグルグルを短く刈り込んでいて、まるでアフガニスタンの傭兵みたいだ。何故アフガニスタンで何処が傭兵なのか判らないけれど。岡田さんと同じ種類の動物には見えない。

及川さんは目付きは悪いが笑うと情けなく、とことん体力のない弱男子である。シュレックにそっくりで、そこに目を瞑ると仙台四郎っぽい。そう思っていたら、名前はホントに史朗であるという。しかも故郷は仙台だというので平太郎はマジで苦笑した。

梅沢さんは、どう観ても象にしか見えない。でつかいのである。太いのである。力士のように巨大なのだ。デカいけど細かくて世話好きでイイ人だが、下品なのだ。

その辺が『怪』^{かいわ}境界の制作サイドの人達で、この人達もまあ仕事はきちんとそれなりにするものの、仕事が終われば馬鹿にしか見えない——かもしれない。

他にも社内協力者はいるのだけれど、そちらは普通の人達で、その辺が協力者と主犯の差なのだ。要するに今のところ、平太郎が見知っている『怪』関連の人達は、おかしい人ばかりということになる。

水木プロから、緊急の呼び出しがあったのだ。

米寿祝賀会があつて、奥様原案のドラマ『ゲゲゲの女房』^{にようぼう}が大ヒットして、文化功労者として顕彰され、金婚式を迎えられて、海外の賞も受賞されて、全集刊行が決定して——と、そりやあもうここ数年おめでた続きの水木大先生だが、今日はそういう話ではないらしい。

「なん——ですかね」

「それが判つたらこんな心配せんでしよう」

編集長はバカだなお前もという顔で平太郎を見た。